

世界遺産登録に向けて

西三川砂金山(5) — 家康と西三川 —

慶長5(1600)年、関ヶ原の戦いを征した徳川家康は、佐渡を始め諸国の金銀山を治めます。

佐渡へは、代官として敦賀の廻船商人である田中清六を派遣します。家康の関ヶ原勝利に貢献したとされる清六は、家康から、恩賞として「佐渡の5千石でも庄内の3万石でも好きにするように」と言われ、佐渡を選びました。

清六は、「船は破れ次第と申し候て渡り申し候」と、冬の荒波を越えて佐渡に渡るほどの意気込みでした(『佐渡金山史』田中圭一編)。

翌年、上杉景勝の家臣であった岡村善兵衛が、西三川砂金山の役人として召抱えられます。一説には、善兵衛の本国は石見であると言われています。

慶長9(1604)年、敦賀七助という山師が、西三川・大須・田切須で砂金を稼ぎ始めます。「敦賀」という苗字から、清六と関わりのある人物であると考えられます。

七助は、この年の正月15日から砂金25枚を上納して稼ぎ始めました。史料によると、「水廻(みずまわし)」

という方法で山を切り崩し、大量の土砂を水で流して砂金を採取し、この方法で、後に銀200枚相当を納めるほどの「山盛(やまざかり)」となった、とあります。

【お詫び】1月号の本欄で、文中の「文禄2(1592)年」とあるのは「文禄元年」です。お詫びして訂正します。

◆市役所世界遺産推進課(金井就業改善センター内) ☎63-5136



西三川砂金山全景

ジオパーク、推進日記

46

天然カイロがあった!?

寒い季節、便利なのは使い捨てカイロです。冷えた体をほんのり温めてくれるカイロですが、佐渡に天然のカイロと呼べる石があることをご存知でしょうか?

海府北部ジオサイトにある願大橋の欄干には、石がそれぞれ4つ載っています。その内、大野亀に近い海側に載っている石は、「温石(おんじやくいし)」です。黒っぽく、ところどころ緑色が入っています。この温石をジオパークの視点で見ると、どんなジオストーリーが見えてくるのでしょうか。

今では少なくなりましたが、かつては海府の海岸に落ちていた温石の岩石名は、「蛇紋岩(じゃもんがん)」といわれています。保温性や耐火性に優れている石です。つまり、一度温まると、冷めにくいのです。通常、地下深くにある岩石ですが、佐渡では海府北部ジオサイトに分布しています。

冬期間に厳しい風が吹き付ける海府に住む人々は、海藻で焚いた火の中で温石石を温め、布や海藻で包んで懐に入れたり、布団の湯たんぽ代わりに使い暖を取っていたとい

う話があります。新潟県上越の木田遺跡からも「滑石(かつせき)」を加工した温石石と見られるものが見つかり、こうした石は「懐炉(かいろ)」の原型とも言われています。

名勝および国定公園の範囲のため、海府北部ジオサイトの海岸では、許可なく海岸の岩石を採取することはできませんが、願大橋を通る時には、欄干にある温石石に触れてみてください。当時の人々が海岸にある石などを見えてきます。夕方だと、日光で温められ、ほんのり温かいかも?しれません。

◆教育委員会社会教育課
ジオパーク推進室(佐渡博物館内)
☎52-2447

